

『記憶の社会的枠組み』 序文・結論（1）

モーリス・アルヴァックス
（金 瑛 訳）

本稿は、Halbwachs, Maurice, 1925, *Les cadres sociaux de la mémoire* の序文と結論の翻訳である（字数の関係上、結論の「記憶作用と理性。伝統と観念」という節は今回割愛し、次号以降に翻訳を掲載する）。底本は Albin Michel 版（1994）を使用した。序文と結論を除いた各章は、第一章「夢と記憶イメージ」、第二章「言語活動と記憶作用」、第三章「過去の再構成」、第四章「記憶の位置づけ」、第五章「家族の集合的な記憶作用」、第六章「宗教の集合的な記憶作用」、第七章「社会階級とその伝統」という構成になっている。

凡 例

- ・〔 〕は訳者による補足・注釈である。
- ・（ ）や――は原文通りではなく、読みやすさを考慮して適宜使用した。
- ・ルビ振りをした語句の原語が動詞の場合は、文中の実際の活用形ではなく原形を表記した。

序 文

最近、『マガザン・ピトレスク』の古い巻を読んでいたら、奇妙な話に目が留まった。九歳か十歳の少女が一七三一年にシャロンの森で発見されたという話だ。少女がどこで生まれ、どこからやって来たのか、誰も分からないという。少女は、幼少期のことを何も覚えていなかった。少女が自分の人生の色々な時期について伝える細かい点を関連づけていくと、少女はヨーロッパ北部、おそらくはエスキモーたちの暮らすあたりで生まれ、そこからアンティル諸島へ、そして最後にはフランスへと連れてこられたと考えられる。少女によると、大海を二度渡ったことは確かだという。また、エスキモーの掘っ立て小屋や小舟、アザラシ、サトウキビ、アメリカ諸島で生産されたものなどを連想させる図画を見せると、少女は興奮しているように見えた。少女は次のことをかなりはっきりと想起したと感じていた。それは、自分が奴隷としてある女主人に仕えていてとても気に入られていたのだが、男主人の方は少女のことが大嫌いで少女を船に乗せて追い出してしまったということである¹⁾。

人づてに知ったに過ぎず、真偽のほどが定かでないこの話を転載するのは、記憶作用が社会的な環境〔*entourage*。「周囲の人々」「周囲の装飾」といった含意がある〕に依存するというこ

とを、この話のおかげで理解できるからである〔ここで、「記憶」という概念に関する若干の補足を行っておく。アルヴァックスは、われわれが通常「記憶」という言葉で語る事柄について、*mémoire* と *souvenir* という概念を使い分けている。本書においては、基本的に *mémoire* は作用や能力として、*souvenir* はその対象となる表象やイメージとして使い分けが行われている。そこで本訳では、*mémoire* には「記憶力」や「記憶作用」の語をあてて常にルビ振りを行った。適宜ルビを振った箇所もあるが、ルビなしで「記憶」とされている語は *souvenir* だと理解してほしい。この二つの用語の使い分けは、現象学というノエシスとノエマに対応していると言えるだろう〕。九歳か十歳の子どもは、最近のことだけでなくかなり昔のことについてさえも、多くのことを覚えている。子どもが突然家族から引き離され、言葉の通じない国——そこでは、人々や場所の様子や慣習の中に、家族から引き離されるまで慣れ親しんでいたものを見出すことができない——に連れてこられたとしたら、何がその子に残るだろうか。その子は、ある社会を離れて別の社会へと移ったのである。そのとたんに、かつて自分がした全てのこと、印象に残った全てのことを想起する能力^{ファキユルテ}を失ったように思われる。それらの記憶は、もとの社会においては苦もなく想起できたにもかかわらず、である。不確かで不完全な記憶のいくつかが再び現れるためには、その子が今いる社会において、引き離されてしまった集団や場^{ミリュウ}を周囲にしばらく再現しておく^{イメージ}図画を、その子に見せることが少なくとも必要である。

この事例は限定されたものにすぎない。だが、われわれがいかにして想起しているのかをもう少し詳しく検討してみると、両親や友人、あるいはそれ以外の人々がわれわれに思い出させる時にこそ、大多数の記憶がよみがえることに気づくだろう。だが大変驚いたことに、記憶論を扱う心理学の概論を読むと、そこでは人間が孤立した存在とみなされている。どうやら、われわれの心^{オペレーション・マンタル}の働きを理解するために必要なのは、個人だけで満足し、仲間の社会に個人を結びつける紐帯を最初にすべて切断することのようである。だが普通、人は社会において記憶を獲得して想起する。また、よく言われるように、人が記憶を再認^{ルコネートル}〔ある対象に対して、過去に経験したこととして確認すること〕し位置づけるのも、社会においてである。われわれが一日に想起する記憶のうちどれだけが、他人と直接的・間接的に関わっているかを数えてみよう。たいていの場合にわれわれが自分の記憶力^{メモワール}の助けを借りるのは、他の人々によって課される質問（ないしは課されると推測される質問）に答えるために他ならないことが分かるだろう。さらに、われわれはそれらの質問に答えるために、他人の視点に身を置き、彼らと同じ一つないし複数の集団に所属していると考え、ということが分かるだろう。しかし、なぜたくさんの記憶の中から、それが本物の記憶だと知ることができるのだろうか。たいていの場合、私が想起するのは、そうするよう他人に仕向けられ、彼らの記憶力^{メモワール}が私の記憶力^{メモワール}の助けとなり、われわれの記憶力^{メモワール}が他人の経験に依拠しているからである。少なくともこれらの場合において、記憶を想起するという行為には、なんら不思議なところはない。脳の中や自分だけが近づくことのできる心の片隅に、記憶の在り処や保存場所を探しても無駄である。なぜなら、記憶は外部から想起させられるからである。また、自分が所属する集団に関心を向け、少なくともしばらくの間はそれらの集団の思考様式を取

り入れるのなら、絶えずそれらの集団から記憶を再構成する手段を受け取ることができるからである。だが、なぜすべての場合においてもそうならないのだろうか。

その意味において、^{メモワール・コレクティヴ}集合的な記憶作用や、^{カードル・ソシオー・ド・ラ・メモワール}記憶作用の社会的枠組みというものが存在する。つまり、枠組みに身を置き、^{メモワール・コレクティヴ}集合的な記憶作用に関与する限りにおいて、個人的思考は想起することができるのだ。眠っている人間が一定の時間のあいだ孤立した状態にあることに着目すれば、夢²⁾を論じた第一章と第二章から私の研究が始まることが理解できるだろう。ここでの孤立した状態というのは、少なくとも部分的には、どの社会とも交わらず関係を持たない時に人が置かれる状態に似ている。孤立した状態においては、^{メモワール・コレクティヴ}集合的な記憶作用の枠組みに依拠することがもはやできなくなる。さらに、そうする必要もなくなる。また、枠組みが作用しない場合に、^{メモワール・アンディヴィデュエル}個人的な記憶作用がどのようなものになるかを観察することで、枠組みの作用を推測することもできるだろう。

だが、他人の^{メモワール}記憶作用によってこのように個人の^{メモワール}記憶作用を説明しても、堂々巡りではないだろうか。その時に実際に説明しなければならないのは、他人がいかにして想起するかである。同じ問題が、同じ言葉で再び提起されたように思われる。

過去が再び現れるのなら、それが私の意識の中に再び現れるのか、それとも他人の意識の中に再び現れるのかを知るとは、あまり重要ではない。なぜ過去は再び現れるのだろうか。もし過去が保存されていないとしたら、過去は再び現れたりするだろうか。^{メモワール}記憶作用についての古典的な理論において、記憶の獲得の次に、想起ではなく保持が説明されているのは、どうやらもう不当だとは言えないように思える。ところが、記憶の保持を脳の働きから説明しないなら——これは実際にとっても曖昧で多くの反論を引き起こした説明なのだが——、記憶が心的な状態として無意識の状態で精神の中に存続し、想起される時に意識へと戻ってくる、と認める以外ないように思える〔ベルクソンの記憶論が想定されている〕。したがって、過去が破壊され消失するのは、表面上のことに過ぎない。一つ一つの個人的な精神は、自らの背後に自分の記憶の連続をすべて引きずっている。お望みならば、多様な^{メモワール}記憶作用が補い支え合っていると認めることができるだろう。だがその場合、私が^{メモワール}記憶作用の集合的な枠組みと呼ぶものは、同一社会の多数の成員の個人的な記憶の結果・合計・組み合わせでしかないだろう。おそらく枠組みは、記憶を後からうまく分離したり、個々人の記憶を他人の記憶との関係において位置づけたりするのに役立つだろう。だが枠組みは、^{メモワール}記憶作用それ自体を少しも説明できていない。というのも、枠組みは^{メモワール}記憶作用を前提にしていると思われるからである。

夢の研究をすることによって、無意識の状態で記憶が存続するというテーゼ〔ベルクソンのテーゼ〕に対して、きわめて重大な議論にすでにたどり着いていたのである。しかし、夢の外側では、過去がそのままの状態ですべて再び現れないことを示さなければならない。つまり、過去は自動的に保存されるのではなく、現在から出発して再構成されるのだと思われる³⁾。他方で、以下のことを示さねばならなかった。まず、^{メモワール}記憶作用の集合的な枠組みは、個々人の記憶が合わさった後に構成されるわけではないということ。そして、枠組みは、もはや単なる空虚な形式として、

よそから来た記憶がその中に挿入されるような場所ではないということ。最後に、枠組みは、正確に言えばむしろ ^{アンストゥルマン}道 具 であり、各時期に社会において有力な思想と調和する過去について、一つのイメージを再編成するために集合的な記憶作用が利用するものだということ。これらのことを示さねばならなかったのだ。過去の ^{メモワール・コレクティヴ}再 構 成 と記憶の位置づけとを扱う第三章と第四章は、このことの証明に当てられた。

この研究は、一部分は批評的なものであるが、^{メモワール}記憶作用に関する社会学理論の基礎を成している。こうした研究を経た後で、直接に集合的な記憶作用を考察し、^{メモワール・コレクティヴ}集合的な記憶作用それ自体を考察せねばならない。実際、想起の際に個人が常に社会的な枠組みを用いることを示すだけでは、十分ではなかったのだ。一つあるいは複数の集団の視点に身を置かなければならない。そのうえ、この二つの問題は、互いに関連しているだけではなく、一つにしかなりえない問題である。個人が集団の視点に身をおいて想起するだけではなく、^{メモワール・ド・グループ}集団に属する記憶作用が個々人の^{メモワール}記憶作用において具現化し現れてくる、とも言えるだろう。それゆえ、最後の三つの章においては、家族・^{メモワール・コレクティヴ}宗教集団・社会階級の集合的な記憶作用と伝統を扱った。だが、別の社会、社会的な記憶作用の別の形態がまだ存在している。とはいえ、私には様々な制約があるため、最も重要だと思われるもの、かつて研究していたがゆえに取り組みやすいものに叙述を限ることにした。おそらくはこの最後の理由から、社会階級に関する章は他の章よりも分量が多くなっている〔本書の執筆以前、アルヴァックスは社会階級を扱った著作を数多く出版している〕。私が試みたのは、別のところで表現され推測されていたある考えを社会階級の中に発見し、それを発展させることである。

結論 (1)

^{スヴニール・コレクティヴ}知覚と集合的な記憶。^{メモワール}記憶作用の社会的枠組み。

この研究の第一部の全体では、心理学者たちの得意分野で彼らに従うことを私は躊躇しなかった。実際、^{フォンクシオヌマン・ド・ラ・メモワール}夢や 記 憶 の 機 能、失語による障害を私が観察したのは、個人においてである。自分自身を調べるのであろうと、他人の精神に起きていることを調べるのであろうと、私は個人を観察した。したがって、私は ^{オブゼルヴァション・アンテリウール}内 的 観 察 という方法を用いざるをえなかった。だがその方法では、社会の目を逃れた意識が現実には社会の作用からも逃れているということを認めざるを得ないように思われる。とはいえ、そこに自らの本質を見出せず、そこから何も見つけられない個人の心的生活の部分に対して、社会が実際に ^{プヴォワール}影響力を広げていくことなどあり得ないだろう。さらに、あらゆる他人の意識の総体が個々の意識に及ぼす影響に似た何かを、一つあるいは多数の意識の中に発見する機会もあり得ないだろう。なぜなら、私が身を置いている視点というのは、まるで数多くの堅固な仕切りによってそうするように、それらの意識を分離し孤立させるものだからである。

しかしながら、自分を内的に観察しているつもり心理学者が、まったく別の対象を前にした時と同じように観察を進めている場合がありうる。また、内的観察が有効な場合でも、実際のと

ころは内的観察がいわゆる客観的なものだからに過ぎないこともありうる。二つに一つである。第一に、心理学者はその種のものでは特異なものを観察しており、その説明を可能にする言葉は存在しない。心理学者には、他人が行った観察によって自分が行った観察を点検する手段がない。また、他人には、心理学者が錯覚に襲われていることを確認する手段がない。現在についても未来についても一緒に検証を行うあらゆる可能性を排除するこの種の記述には、どのような価値がありうるだろうか。第二に（おそらくはベルクソンの心理学に与することになるだろうが）、心理学者が考察しているものは特異なものではなく、その表現を可能にする言葉も存在する。この観察がとりわけ困難なある種の努力を課すということ、そして、表現と表現された事物との間には相違が残っていることを認めよう。われわれは不可能なことには出くわさず、習慣によって徐々に努力が楽になり、表現がより適切なものになることを期待できる。だが、意識の状態には、どのようなにも表現できない特定の側面——とはいえ、それが生じている人には、そうした状態が生じている感覚はあるのだが——が存在すると言えるのだろうか。内的観察がそこで始まる。ただし、自分の観察の真偽を他人の観察によって確かめる見込みがなくなるわけではない。しかしながら、以前に他人が抱いたのと同じ感覚をわれわれが実際に扱っていることを示す^{シンニユ}記号について、その意味に関する取り決めがないのならば、こうした検証は不可能であろう。他人が自分の中に見ているはずのものを他人に説明できると、心理学者は思い込んでいる。そうである以上、心理学者は意識の状態を並べて外在化していることになる。確かに、見ていない現実や特徴が存在するというものを、見ているものから導き出すこともありうる。だが、そうした現実や特徴が意味を持つのは、見ているもの（外的と言われる観察に全面的に根拠を置く認識）と関わる時だけである。

心理学者たちは内的観察を、物質的対象の知覚との対比によって定義している。物質的対象の知覚においては、われわれは自分の外に出て、外部の事物と部分的に混ざり合っているように見える。一方で内的観察においては、自分の中に戻るように見える。だがこの区別は、孤立した個人を想定する場合にしか認められない。この時に外的と呼ばれているのは、自分の身体に外在しているもの全てである。また広義には、自分の精神だと考えられているものに外在している自分の身体そのものである。それに対して、内的と呼ばれているのは、身体に外在していないもの全てである。また広義には、精神（精神それ自体の内容、特にわれわれの記憶）に外在していないもの全てである。あるいは、もはや孤立した個人ではなく、社会で生活する人々の集団が考えられているのだろうか。こうした対立は、どのような感覚によって維持されているのだろうか。純粹に外的と言える知覚は存在しない。なぜなら、集団の成員がある対象を知覚する場合には、対象に名前を与えてカテゴリーの中に分類しているからである。つまり、その人は集団の^{コンヴェンション}慣習に従っており、慣習が他人の思考やその人の思考を満たしているからである。「慣習」の原語は convention であり、「規約」「慣行」「慣例」などとも訳される。この概念は、第二章の言語論においても頻出する重要概念である。今も昔もどの社会にも所属していない個人における、記憶とまったく混じり合わない直観的な知覚^{ベルセプション・アンテユイティヴ}「直覚」とも。推理や考察によらずに瞬間的に物事

の本質をさとること〕を想像できるのだとしよう。その場合には、人々が対象のことを理解することを可能にする言葉や想念についての記憶を伴う集合的知覚も存在しないことになる（なぜなら、そうした記憶が集合的知覚を可能にするからである）。したがって、純粹に外的な観察は存在しない。人は対象を見ると同時に、他人が対象をどう見るのかを想像している。たとえ自分の外に出るとしても、それは対象と一体化するためではなく、他人の視点から対象を考察するためである。それが可能なのは、他人との関わりを人が思い出しているからである。したがって、記憶を欠いた知覚は存在しない。だが反対に、純粹に内的と言える記憶（個人的な記憶作用の中でしか保持できない^{スヴニール}記憶）も存在しない。実際、記憶が集合的知覚を再生する以上、記憶それ自体は集合的でしかあり得ない。また、自分の集団の思考に依拠してはじめて思い浮かべることができるものを、個人が自分の力だけで新たに思い浮かべることができない。記憶が記憶作用の中で個人的な形で保存されよう——自分の仲間の社会を忘れることによってのみ、そして、他人に負うすべての観念が取り除かれてたった一人になる場合にのみ、個人が過去を想起できるのだとしよう——。仮にそのようなことがあれば、自らの過去の状態を前にして、個人はそれらの状態と混ざり合うかもしれない。すなわち、過去の状態を^{ル・ヴィーヴル}体験し直すという幻想を抱くかもしれない。しかし既に示したように、自分が思い浮かべるイメージと混ざり合う場合（まったく一人きりで想像したことを見ていると感じる場合）がある。だがそれは、もはや思い出すことが不可能な唯一の時でもある。それは夢を見ている時である。反対に、人が現在と過去を十分に区別している時——その人自身は現在にいるが、外部の対象や他人へとその人の精神は向けられている（つまり、その人は自分自身から抜け出している）時——には、人はよりよく思い出すことができるようになる（より正確かつ具体的に過去を再現できるようになる）。したがって、知覚を欠いた記憶は存在しない。人間を社会の中に戻すやいなや、外的観察と内的観察という二つの観察を区別することは不可能になる。

同じ考えを別のかたちで表現してみよう。社会から個人を引き離してみよう。あたかもその人が世界で出会う唯一の人間であるかのように、一方ではその人の身体について考察し、他方ではその人の意識について考察してみよう。また、個人が知覚する時や思い出す時に、こうした抽象化の果てに身体や意識の中に見つかるものを探してみよう。個人の身体の中で見つかるのは、脳と感覚—運動的な神経器官であり、そこでは純粹に物質的な変化が生じている。社会を除外している以上、これらの変化の起源——脳質において脳や神経器官のメカニズムがどう組織されたのか——については、私は全く念頭に置いてないし考慮もしていない。個人において見られるものを、他人においてそれに対応するものから切り離すのだから、人はその意味には目を向けず、個人において見られるものの物質的な性質に注意を向けるようになる。その場合に苦もなく説明できるのは、何らかの形で意識の状態に類似しているものは、特定の物質的な運動からは一つも取り出せないということである。それならば、記憶作用をどのように説明すればよいだろうか。個人しか存在せず（これがまさに冒頭の仮説である）、個人の記憶作用は身体に起因し得ないのだから、身体の外や個人の中に、記憶の再現^{レ・アパリシオン}〔再び現れてくること〕を説明する何かがなければ

ばならない。しかし、意識の中で、他人の干渉を少しも前提としないように見えるものとは何だろうか。純粹に個人的な意識の状態の典型とは、どのようなものなのだろうか。それはイメージである。言葉から引き離されたイメージ、個人に（個人だけに）結びつく限りでのイメージである。すなわち、一般的な意味作用や対人関係や観念といったあらゆる環境^{アントウラージュ}（最初から除外すると決められていた社会的な要素のすべて）を捨象したものである。イメージは身体から生じることが不可能なため、イメージそれ自体によってしか説明できない。だとすれば、イメージが初めてわれわれの意識に入ってきた時から、そのままの状態で存続するイメージが記憶に他ならないということになるだろう。そこで立ち止まってみよう。われわれが発する仮説が与えられている以上、結論が必要なことを認めよう。だが、これらの仮説にはかなり議論の余地があると思われる〔以上のイメージをめぐる議論は、ベルクソンの記憶論を念頭においてなされている〕。

第一に、個人において生じている運動や神経系の変化は、他の人々においても生じている。一人の個人においてさえ、あるいは複数の個人においてこれらの運動や変化が生じているのは、それらが他の人々において生じているからに他ならない。それらの運動や変化を準備するのが発音の運動や脳内の変化ではないとすれば、それは何によるのだろうか。ところで、言葉と言語活動^{モランゲージュ}が前提としているのは、一人の人間ではなく、結合された人間の集団である。なぜこの集団を解体してしまう必要があるだろうか。ある人を孤立させたくて、言語活動^{ランゲージュ}の体系に位置づけ直さずにその人の発話自体を検証してみよう。さらに、発話がある集団に差し向けられた問いや応答であることも忘れよう。確かに、こうした場合においては、言葉の物質的な側面、発音時の身体の動きしか観察されない。だが、話している人間の意識内で前景化しているのは、その人の発話の意味ではないだろうか。そして最も重要な事実は、その人がそれらの意味を理解しているということではないだろうか⁴⁾。口に出された一連の言葉の背後には、理解^{コンプレアンション}という一連の行為がある。これらの行為はいずれもが心的な事実である。これらの事実がまさに社会の存在を前提としているがゆえに、個人に留まる心理学的な分析は、これらの事実を考慮していない。運動とみなされた発音の運動がまったく心的ではないこと、そして、記憶に似ているものをそこから何も引き出せないことを明らかにしたのは、正しいことであった。だがその時、発話に伴って意味を与える想念・観念・表象^{ノーション}が、記憶と共通するものを何も持たないということは、明らかにしなかった。しかし、それらは実際には心的な状態である。身体の状態は意識の状態を説明しないが、意識の状態は別の意識の状態を生み出したり再生したりできるし、別の意識の状態を説明することもできる。

他方で、私は純粹に個人的なイメージ——特定の瞬間にわれわれの意識へと入ってきた後で、記憶作用^{メモワール}の中でそのままの状態で存続し、再び現れることによって記憶を形成するイメージ^{スヴニール}——について話している。では、純粹に個人的なイメージとは、どういったものなのだろうか。これから述べるように、少し複雑な意識の状態や、ある光景や出来事の記憶は、二種類の要素を含んでいる。第一の要素は、われわれ以外の集団の成員だれもが認識・理解できるもの全てである。つまり、物や人についての想念、物や人を表す言葉とその意味である。第二の要素は、われわれ

が自分自身であるがゆえに、意識の状態や記憶が現れる固有の側面である。社会によって説明される第一の要素は除外しておこう。われわれは社会の外部に身を置いているからである。だがその場合、何が残るだろうか。個別に考えられた物とその性質、人とその性格には、他人のために定義された意味作用^{シニフィカシオン}がある。そうである以上、それらが分類される仕方は、われわれの精神の中に残っているし、われわれの精神の中だけに残っている。そして、各瞬間にわれわれの意識野を支配している別のイメージという環^{アントゥラージュ}境の中には、これらに適合するイメージの一つ一つが呈する特徴の外観が残っている。つまり、一つ一つ個別に取り上げられたわれわれの記憶は、すべての人に属している。だが、われわれの記憶の連続は自分だけに属しているし、その連続を認識し想起できるのは自分だけであろう。しかし、問題となるのは次のことである。すなわち、部分の一つ一つについて真実であることが全体についてそうならないのかを知ること。そして、諸対象のこうした連続（これは完全な光景であるか、出来事全体である）をわれわれが理解し想起することを可能にさせるためには、社会——その補助によって、われわれはある対象の記憶を理解し想起できる——が干渉せず、する義務もないのかどうかを知ること。これらのことが問題なのである。この問題に決着をつける唯一の手段は、ある経験が現実になることである。その経験というのは、切り離された対象のイメージ（あるいはその性質や細部）を理解・想起できるという経験であり、複雑な光景や出来事と一致するイメージの連続を理解・想起できないという経験である。ところで、こうした経験は存在し、絶えず繰り返されている。それは夢という経験である。夢を見る時、われわれは夢の細部の一つ一つを十分に理解している。夢を見ている時に見かける対象は、目覚めている時に見かける対象であり、われわれはそれらの対象がどのようなものかをよく知っている。まさにその時に、記憶作用^{メモワール}がそれらの対象に影響力を持っているのは、おそらくは社会とわれわれとの接点が消え去ってはいないからである。われわれは言葉を発し、その意味を理解している。夢の中でわれわれが考え話している対象を再認するためには、これで十分である。だが、目覚めた状態でわれわれが見て体験したことを再生するような、筋の通った場面や出来事の系列、光景全体などを、われわれはもはや想起できない。われわれがもはや他人と関係していないという点で、夢は目覚めている時と異なっている。それゆえ、夢においては、思い出すために必要なもの（社会の支え）が欠けているのだ。

一つないし複数の慣^{コンヴァンション}習の体系がなければ、社会的な生活も思考も認められない。夢から覚める時あるいは反対に眠りに落ちる時、われわれは新たな世界へと入り込んだように感じる。とはいえ、他方の世界におけるのとは明らかに異なる性質を持つ対象を、一方の世界において知覚しているわけではない。だが、これらの対象は、同じ枠組みの中にはない。夢の枠組みは、まさにそこに並んでいるイメージに左右されている。それ自体として思い描かれたイメージを除くと、枠組みにはどんな現実性^{レアリテ}も固定性^{フィクシテ}もなくなってしまう。では、夢を見ている時に、われわれは現実の空間や時間のどの部分にいるのだろうか。なじみの場所にいると思われるまさにその時に、突然そこからかなり遠くへと移されても、われわれは全く驚かない。夢の枠組みは、目覚めている時の枠組みと共通するものを何も持たない。そのうえ、夢の枠組みが価値を持つのは、われわ

れに対してだけである。夢の枠組みがわれわれの空想に制限を加えることはない。また、われわれの想像が変われば、われわれは想像そのものを修正する。反対に、われわれが目覚める時には、自分の集団の人々によって認定され固定されている時間・空間・秩序が、われわれに課されている。それゆえ「^{サンティマン・ド・レアリテ}現実感」は、われわれが夢の中で見たこととは対置される。だがこの感覚は、^{アクト・ド・メモワール}記憶という行為の出発点なのだ。想起が可能になるのは、われわれの興味を引くような過去の出来事の位置を、^{メモワール・コレクティヴ}集合的な記憶作用の枠組みの中に見出すという条件においてのみである。より多くの枠組みと接触する地点に記憶が再び現れれば、記憶はいっそう豊かになる。というのも、枠組みは実際には、部分的に互いが交差し重なり合っているからである。枠組みやその一部が消失することによって、忘却は説明できる。なぜなら、枠組みが消失することで、枠組みに注意を向けることが不可能になるからである。あるいは、注意が別のところに逸れてしまうからである（不注意はふつう、注意しようと努力した結果にほかならない。そして大抵の場合、忘却は不注意から生じている）。だが、われわれの記憶のいくつかが忘却されたり歪曲されたりすることは、枠組みがある時期から別の時期にかけて変化するという事実によっても説明できる。情勢や時代に^{コンヴァンション}応じて、社会は様々なやり方で過去を思い浮かべる。つまり、社会は自らの^{メモワール・コレクティヴ}慣習を変化させている。社会の成員一人一人は慣習に従っているため、^{メモワール・コレクティヴ}集合的な記憶作用が進化するのとまさに同じ方向に自らの記憶の方向を変えていく。

したがって、過去がそのまま個人の^{メモワール}記憶力の中で保存されるという考え方は放棄しなければならない。この考え方においては、諸個人が存在するのと同じだけの異なる^{エブリューブ}印画〔陰画・透明陽画から感光紙上に画像を焼き付けたもの〕から、過去が引き出されたかのように見なされているからである。社会に生きる人間は、その意味を理解している言葉を使用する。これが集合的思考の条件である。ところが、一つ一つの（理解された）言葉には記憶が伴うし、言葉と対応させられないような記憶は存在しない。われわれは自分の記憶を想起するより前に、それらについて話している。各瞬間にわれわれが自分の過去を再構成することを可能にしているのは、^{ラン・ガー・ジュ}言語活動と社会的な^{コンヴァンション}慣習の体系全体であるが、これら二つは互いに関連し合っているのだ。

^{スヴニール・コレクティフ}集合的な記憶は、^{ノーション}一般的な想念であると同時に、事実や人物についての表象でもある。

われわれの記憶やイメージ、あるいは具体的なイメージの総体は、諸々の図式や枠組みが組み合わされた結果として生じる。だが、このことをどう理解したらよいだろうか。^{ル・プレザンタシオン・コレクティヴ}集合表象が^{フォルム}空虚な形式なのだとしたら、それらに近づくことで、個人的な記憶の生き生きとした感覚的な^{マティエール}素材を得ることなどあり得ないだろう。容器がどうして内容物を再生できるだろうか。私はさして新しくもない難問にぶつかっている。これは、哲学者たちの関心を奪い続けてきた難問でもある。特にベルクソンの体系でこの難問が解決できないものに見えるのは、なぜだろうか。それは、ベルクソンがその体系において、イメージと呼ばれるものと概念と呼ばれるものとを、これまで決して試みられなかったほど明白に対立させたからである。ベルクソンの体系におけるイメージは、^{ノーション}関連する想念すべて、^{シニフィカシオン}知的な意味作用のすべてから解放されることによって定義され

ている。そして概念は、すべてのイメージを取り除くことによって定義されている。ベルクソンの体系において仮定されているのは、イメージ記憶^{スヴニール・イマージュ}〔原語は *souvenirs-images* であり、「イメージとしての記憶」というニュアンスを持つ〕が存続していて再び現れるということである。そうだとすれば、上記のように定義された概念によってイメージを再構成できないことになる。

ここでは、根本的でもある問題を哲学的な視点から手短かに定義することしかできない。二つの点を指摘するだけにしておこう。プラトンについての現代的な解釈が明らかにするところによれば、プラトンの理論は、彼がその理論を構想し練り上げた当時のギリシャ人の考え方に関係している。ギリシャにおいては、勝利の女神ニケ、愛の神エロス、笑いの神、死の神、哀れみの神、健康の神、富の神といった神々が、民衆の想像力によって作り出された。それは、人々が想像によって神々の中に活動的な力を見て取り、自分や他人の中に生き生きとした活動的な力を感じ取ったからである。それは単なる擬人化ではなかったが、もはや抽象化でもなかった。人々が同様のことを感じていたとすれば、活動的で永遠なる力、すべての現世のものを超えた高みにある力として、正義や美德を考えるのも当然ではないだろうか。詩人や芸術家たちは、その先駆けである。おそらくプラトンは、正義の女神を作り出したのではない。むしろ彼の念頭にあったのは、中立的な指示によって、あらゆる人格的な要素をそこから取り除くことである。しかし、彼にとってそれは抽象化とは正反対のことであった。また、それは概念でもなく、概念を超えたものであり、実在するものである。したがって、プラトンのアイデアは、^{アトリビュ}「属性」すなわち抽象的に考えられた性質を示すのではなく、^{スュジェ}「主体」^{ベルクソン}（人格ではないにしても）を示している⁵⁾。だが他方で、共有された概念や想念^{ノーション}の中にスピノザが見出したのは、不完全で一部分の欠けた思考様式だけである。スピノザによれば、より高度で適切な認識の類型が存在する。この類型がわれわれに提示するのは、事物の抽象的な特性ではなく、存在の「個別の本質」である。それはまるで、われわれの知的活動の真の目的が、理性的で人格的な実在の把握に達するか、そのために努力することであるかのようだ。したがって、アイデアの理論を発明したとされている哲学者〔プラトン〕とその理論をおそらくは最も深く掘り下げた哲学者〔スピノザ〕は、アイデアの中に事物に対する抽象的な視点を少しも見て取らなかった。抽象的な視点によって認識できるのは、諸々の関係や色あせた細部だけだからである。だが反対に彼らが考えていたのは、アイデアが可感的なイメージよりも豊かな内容を持っているということである。すなわち、可感的で個人的なイメージはアイデアの中に含まれているが、その内容の一部分でしかない。他方で、アイデアは一つのイメージを含んでいる（そして、それ以外の多くのイメージも含んでいる）。だがアイデアは、容器であると同時に内容物でもある。^{ルプレゼンタシオン・コレクティヴ}集合表象には、そうした定義に対応するのに必要なものすべてが含まれている。また、集合表象は、意識の個人的な状態（特に記憶）の^{プロデュクシオン}産出ないし^{ルプロデュクシオン}再現を説明するために必要なものをすべて含んでいる。

だが、事実の領域にとどまっておこう。事実の観察——夢の中では、出来事の記憶や複雑な場面の記憶を想起できないと知ること——によって、^{メモワール・コレクティヴ}集合的な記憶作用の枠組み（^{メモワール・アンディヴィデュエル}個人的な記憶作用が支点としているもの）の存在が明らかになる。私が枠組みの中に密接に繋がりがあった二つの側

面を区別できるようになったのは、枠組みを観察することによってである。実際、私は次のことを明らかにした。枠組みを成す諸要素は、多少なりとも論理的であり、論理的に脈絡のある想念（反省の手がかりを与えるような想念）として考える。また同時に、それらの要素は、時間と空間の中に位置づけられた出来事や人物についての、イメージに富んだ具体的な表象としても考える。以上のことを私は明らかにしたのだ。社会的思考が純粹に抽象的な想念しか含まないのであれば、個人における知性は社会によって十分に説明できる。社会によって、個人は集合的思考に参加するというわけである。だが、イメージと観念の間には、観念からイメージを演繹することができないという性質の違いがあるだろう。反対に、集合的な想念が「概念」ではなく、事実・人格・出来事といったものを契機にしてしか社会が思考できない場合を考えてみよう。この場合には、イメージを欠いた観念は存在しない。より正確に言えば、観念とイメージは、二つの要素（われわれの意識状態の社会的な要素と個人的な要素）ではなく、二つの視点を表している。そして、自らの想念全体の中や自らの生涯や歴史の中に自分の居場所を刻印している同一の諸対象を、社会はこの二つの視点から同時に考察できるのである。

では、人は記憶をどうやって位置づけているのだろうか。記憶を見出すには、自分の周囲を見て他人について考え、社会的な枠組みの中に身を置けば十分である。それゆえ、われわれがいつも携えている「指標」の助けを借りて、位置づけは行われる。これが私の答えである。他方で私は、次のことも確認した——われわれの現在により近い領域をわれわれの記憶力が探し回るにつれて、指標は増加する。それゆえ、かつてはあまりにも注意を向けていなかったがゆえに注意することをやめてしまった物や人すべてを、われわれは思い出せるのである——。結局、一連の反省によって、ある対象から別の対象へ移行し、ある出来事から別の出来事へと移行できるように思われた。そしてそのような移行は、あたかもわれわれが対象やその外的な側面、出来事やそれが時間や空間の中で占める場所について考えていると同時に、対象や出来事の性質や意義についても考えていたかのように起こる。言い換えるなら、対象と出来事は、二通りの方法でわれわれの精神の中に並べられている。第一の方法は、それらが現れた時間的な順序に従う方法である。第二の方法は、人々が与える名前や、集団内で人々が割り当てる意味に従う方法である。つまり、対象と出来事の一つ一つに、観念であると同時にイメージでもある想念が対応しているのだ。「想念」の原語は *notion* である。直前のアルヴァックスの文章からも分かるように、この語は言語的なニュアンスの強い「観念 (*idée*)」・「概念 (*concept*)」と、身体的なニュアンスの強い「イメージ (*image*)」との間に位置づけられるような実在のあり方を表している。

旅行の目的地に近づくにつれて道路標識や掲示が増加するのと同じく、特定の目立つ出来事の周囲ではその他多くの出来事が等しく間隔を詰め合っていることがある。その一方で、いささか間隔が離れているうえにかなり不ぞろいな「指標」は、いくつかの時期において、ほとんどすっかり欠けてしまっている。だとすると、こうした指標を社会が時間の中に固定するのはなぜなのだろうか。それらの指標は、期間を分割するのに役立つだけではない。それらの指標は、現在よりむしろ過去の中に位置づけられる技術的・宗教的・道徳的な想念だけでなく、社会の思考

も活性化している。歴史家たちはますます、過去の出来事から一般的な結論や教訓を引き出すのを拒むようになっていく。だが、事件が生じる時にそれらについて評価を下すだけでなく、存命中の人々や彼らの命日についても評価を下すような社会は実際のところ、自らの重要な記憶の一つ一つの中に、自らの経験の断片だけでなく反省が反映されたものもしまい込んでいる。過去の事実は教訓であり、故人は激励や忠告であるから、私が記憶作用の枠組みと呼んでいるものは、観念や判断の連鎖でもあるのだ。

反対に、社会にとって自らの歴史のこれこれの時期を参照する契機にならない一般的な観念は、ほぼ存在しない。自らを知ること、自らの制度・構造・法・習俗について反省することが社会にとって問題となる場合には、以上のことは明白である。たとえば、ほどよい教養を身に着けたフランス人の男性が、イギリスやアメリカのような国が政治に対して抱く考え方を理解するのに困難を覚え、そうした国の憲法をせいぜい言葉としてしか覚えられないのはなぜだろうか。それは、彼がそうした法制化の出発点としての一連の偉大なる出来事について何も知らないか、あるいは非常に貧しいやり方でしかそれを知らないからである。また、憲法で定められた権利という観念は、歴史の光に照らされてはじめて明るみになるようなものだからである。他の多くの観念についても同じことが言える。科学も例外ではない。確かに、科学は科学史と混同されはしない。しかし、学者が現在という平面にだけ身を置いているというのは、事実ではない。たとえ学者が新しい実験や独自の思索に没頭している時でも、研究の方向に従っているという感覚や、その起源や出発点が自分の背後に見つかる理論上の成果を引き継いでいるという感覚を、学者が抱かないということはある得ない。なぜなら、科学というのはきわめて集合的な作品だからである。偉大な学者たちは自分の発見を、科学の歴史におけるその日付に置き直す。つまり、科学的な法則は、学者たちの目の前で、時間の外側に位置づけられた広大な体系の要素として再び現れているだけではない。学者たちが科学的な法則の背後に認めているのは、科学的な法則だけではなく、この分野における人間精神の努力の歴史の全てなのである。

こうした観点から、私はいくつかの場^{ミリュー}——そこでは、すべての人間もしくは大部分の人間が生活を営んでいる——を考察した〔milieuはデュルケームの社会形態学の用語で、人格（personne）と事物（chose）が結合したものと定義されている。『社会学的方法の規準』（講談社学術文庫）を参照のこと。なお、milieuは「環境」と訳されることも多いが、「場」と訳している〕。つまり、家族・宗教社会・社会階級である。われわれはそれらをいかにして思い浮かべるのだろうか。それらはどのような思想を呼び起こし、われわれの精神の中にどんな記憶を維持しておくのだろうか。ある時代や地域における家族という組織を、外側から描くこともできるだろう。そして、抽象的な言葉で、親族関係やそれがもたらす義務のあり方を定義することもできるだろう。また、家族の精神の強さを測ることもできる。また、家族生活の枠組みを描き、成員の数、そこで生じている出来事、生じていない出来事によって、家族をいくつかのカテゴリーに分類することもできる。だが、必ずしもこうした方法で、各人が所属している同居集団^{グループ・ドメスティック}を人々が思い浮かべるわけではない。親族関係の中には、自然法則の客観性を思い起こさせるよう

な何かが存在している。家族の義務は外部からわれわれに課される。それらの義務は、われわれが作ったものではないし、変更もできない。そのうえ、心や精神の資質によっても、親族の個性によっても、それらの義務は全く説明できない。親族について話す時、われわれはまさに一般想念を心に抱いている。すなわち、父、夫、子どもなどの想念である。家族の成員の一人一人が他人の目から見てもそれぞれ個性的な顔立ちをしているのと同じく、それぞれの家族が自らの歴史を持つことに変わりはない。われわれがこれらの関連すべてを区別できるようになったのは、自分の家族においてであり、一連の私的な経験^{エクスペリエンス・ベルソネル}と引き換えにしてである。われわれが家族に対して抱く感情以上に、具体的であり、感情の中でもとりわけわれわれに固有のものと思われるものはないのである。

言い換えれば、家族とは ^{アンステティュション} 制度 である。われわれは反省によって、家族を別の制度の中に位置づけ、その中に複数の器官^{オルガン}を区別し、それらの機能^{フンクシオン}の性質を理解する〔ここでは organe を「器官」と訳した。フランス語の organe social には「社会器官」(社会的分業を有機体の各器官になぞらえた場合の各部分) という意味があるためである〕。他方で、一つの家族の生活にはいくつかの出来事が含まれている。われわれはそれらを思い起こし、出来事の当事者であった人々についての記憶を保持している。だが、同居集団^{グループ・ドメスティック}のこの二つの側面を対立させたり分けて考えたりする必要はない。なぜなら、実際にはこの二つの側面は混ざり合っているからである。家族の記憶を想起したり再構成したりすることが可能だと認める以外ないだろう。確かに、たとえば利益について話していて、遺産のことで親族と衝突してしまうような時には、むしろ思考は親族関係のほうに向けられてしまい、家族の歴史からは逸れていくように思える場合もあるだろう。また、人格的な関係が前面に出てくる場合もある。その場合には、親族は自分が親族であることを忘れてるように見え、友人がもう一方に抱くような情愛^{アフェクション}の感情を示している。だが、どちらの方向も極限まで至れば、人は家族から抜け出すことになる。すなわち、親族をたんなる抽象的な結合とはみなさず、たんなる親和力によって親しくなる人々ともみなさないという条件においてのみ、人は親族のもとに留まるのである。このことを認めない人などいるだろうか〔「親和力 (affinités électives)」とは、類縁性のある物・人が互いに選ぶ合う力のこと。化学用語を比喩的に用いたゲーテの同名の小説 (1809) による。邦訳は『親和力』(講談社文芸文庫)〕。既に述べたように、親族には独特な点や奇妙な点がある。また、非人格的な規則^{レーグル・アンベルソネル}のせいで、われわれは両親を避けることができない。にもかかわらず、われわれは他人よりも親族に親しみを感じ、まるで自分が彼らを選んだかのように、他の人々よりも親族のことを好いているのだ。親族関係という想念は、われわれが親族に対して私的に抱くイメージ^{イメージ・ベルソネル}と密接に結びついている。自分自身の視点あるいは同居集団^{グループ・ドメスティック}の視点のどちらに身を置くかには関係なく、われわれは親族のうちの一人を思い浮かべ、唯一の存在そして事実取り替えのきかない存在として、親族全員がその人のことを思い浮かべている。家族の精神は、二重の特徴を持つ思考によって作られている。すなわち、家族の精神は想念である一方で、イメージないしイメージの総体なのである。

だが、宗教的な信念^{クルワイアンス}においても事情は同じである。よく言われるのは、宗教を実践する・し

ないということである。そうした言い方がされるのは、儀礼、秘蹟〔神の霊的恩恵を外的な見える形で表す印で、キリストによって定められた恩恵を受ける方法〕、典礼の決まり文句の朗誦、祈りが、断続的に遂行され刷新される行為として、それ自身が永遠の価値と直接的な効果を持つと思われているからである。司祭によって行われる仕草が何を意味しているのかをまだ全く知らないとしても、新生児の洗礼はその子を生まれ変わらせる。告解や聖体拝領^{コミュニエ}をする場合、たいいてい人は罪のことばかり考える。人は罪を洗い流したいと思い、その重荷から解放されるために恩寵を得たいと思っている。そして、恩寵が得られるまでは、未来において待望される善きこととして、恩寵が心を占めている。このように理解されるなら、われわれにとっては、宗教的な事物は時間を超えて存在しているように見えるだろう。教義は、永遠の真理を持つ真なるものである。ある意味、宗教的な思考よりも抽象的なものは存在しない。神や超自然的な存在を、崇拝^{キュルト}の向けられるものであり、非常に一般的な性質によって特に定義されるものだと考えようとも、神と人間との関係、原罪、贖罪、恩寵、天国といった観念を作り上げようとも、人はシンボルを思い浮かべるか、言葉を口に出している。だが、よく知られているように、こうしたシンボルや言葉は、われわれの記憶からこぼれ落ちていく現実を漠然と表現するか、言葉で表現するかしたものである。もしわれわれがそこにとどまり、宗教的思考がそれ以外のものではあり得ないとしたら、宗教的思考が適用されるのは、どんなイメージや可感的実在とも一致しない観念（物質の空虚な形式）だろう。ところが、内容のない概念は、われわれの行動を導くことはできても、何も認識させてはくれない。カントはこのことによく気づいていた。「理性の限界内における宗教」がこの種の観念に依拠しているのであれば、それは実践的な道徳以外の何物でもないだろう〔『カント全集〈10〉たんなる理性の限界内の宗教』岩波書店、二〇〇〇年〕。

だが、宗教はそれとは別物であり、それ以上のものである。教義や儀礼の形式を純粹に合理的な動機によってはまったく説明できない以上、現在ではなく過去の中に、その存在理由を探さねばならない。実際、あらゆる宗教は名残^{スルヴィヴァンス}である〔「名残」と訳した *survivance* には「死後の生」や「不滅性」という意味もあり、民族学では「（文化要素の）残存」を意味する〕。宗教とは、ずっと前に過ぎ去った出来事や死んだ聖人たちを、共に記憶^{コメモラション}することにはほかならない〔「共に記憶すること」と訳した *commémoration* は、日常語の文脈では「追悼」「記念」を意味し、カトリックの文脈では「記念唱」（ミサ典文中、Memento で始まる死者と生者に対する祈り）を意味する〕。そして、宗教的な実践がそうあり続けるためには、少なくとも祭式執行者において、また可能ならば信者たちにおいても、神聖な人物か聖なる人物への信仰^{クルワイアンス}が伴わなければならない。なぜなら、彼らは自らの存在を表に出し、決められた場所や時期において影響力を及ぼしたからである。また、彼らの実践は、多少なり象徴的な形式の下で、動作・言葉・思考を再生しているからである。したがって、あらゆる宗教的な表象は、一般的かつ個別的、抽象的かつ具体的、論理的かつ歴史的である。神学的証明に伴う信仰箇条を検討してみよう。神学は明確な想念に対して、厳格な推論^{レゾナンス}という方法を適用する。したがって、信仰箇条とは合理的な真理^{ヴェリテ・ラシオネル}なのである。信仰箇条をもう少しよく見てみよう。信仰箇条はキリストの存在を前提とし、キリストの言葉・

生・死・復活などが真実だということを前提としている。われわれには論理的な真理に見えたものが、記憶になったのである。いやむしろ、最初から記憶だったのである。

確かに、時代・場所・人物に応じて前面に出てくるのは、宗教の論理的な側面か歴史的な側面のどちらかである。教義主義の神学者たちが宗教を論証しようとする一方で、神秘主義者たちは宗教を生きることを渴望している。教義主義者は、教義の時を超えた側面を強調する。それに対して、神秘主義者たちは、人格として表象された神的存在との思考・感情の親密な交感^{ベルソンヌ コミュニオン}へと入り込むことを渴望している。これらの神的存在は、宗教が誕生した時から、そもそも現れ続けている神々である。しかし、またここでも、どちらの方向で極限に至るとしても、人は宗教から離れてしまうだろう。宗教は観念の体系には還元されないし、個人的な経験に尽きるものでもない。教義主義者は、頭の中で作り上げたものによって神秘主義者に対抗するのではなく、宗教を生じさせた出来事を集合的・伝統的に解釈することによって対抗する。神秘主義者に関して言えば、彼らは自分の感覚によって教会の見解に対抗しているわけではない。神秘主義者の直観や恍惚^{ヴィジョン}が宗教の中に入り込むのは、教義の形をとる場合だけである。つまり、それらが地位を占めているのは、伝統的な信仰^{クルワイアンス}という枠組みにおいてである。伝統的な信仰という枠組みの中に神秘主義者の直観や恍惚が認められるのは、それらが枠組み全体を強化するからである。それはまさに、幾何学における問題の解が、問題がその応用に他ならない定理を明らかにし、その理解を深めさせるのと同じことなのである。

したがって、あらゆる宗教的思考は観念として理解可能であるだけでなく、一連の具体的な記憶——空間と時間の中に位置づけ可能な出来事や人物についてのイメージ——から成っている。ここでは二種類の要素を問題としているわけではない。二種類の要素とは、一方が知的なもの、他方が可感的なものであり、いわば知的なものが可感的なものの上に付け加えられるか、その中に組み込まれている。つまり、教義の内容は、神秘主義者が可感的なものに組み込んだものによって豊かになる——神秘主義者の経験は、それが教義的な視点へと浸透するにつれて一層磨きをかけられ、より人格的な形で現れるようになる——のである。同一の内容が、神秘思想と教義の中を巡っている。宗教的な思考は具体的なイメージであり、そこには大多数の観念と強制的な力がある。あるいはお望みならば、宗教的思考は、唯一無二の人物や出来事を表象する観念だとも言えるだろう。

最後に社会階級であるが、そこに含まれる人々は、彼らが互いに示したり他の人々が彼らに示したりする敬意^{コンシデラシオン}の種類によって、他の人々と区別される。旧体制の下では、貴族階級は最高の地位にあった。そして貴族階級に所属するためには、これらの地位のひとつに就かねばならなかった。したがって、貴族の集合意識^{コンシアンス・コレクティヴ}や社会全体の意識^{ソシエテ・ジェネラル}が貴族に向かった場合には、序列や地位についての観念が前面に出てくる。ある意味、社会や貴族階級におけるそうした分割や準分割を理解するためには、現在におけるそれらの存在理由をよく理解していれば十分だった。封建時代において最も高く評価されていた資質^{クマリテ}（戦時の勇気や騎士の忠誠心）を最も多く有していた人々や家族は、名誉や特権によって大衆よりも高い階級へと上昇し、彼らの同輩衆や彼らより

地位の低い人々に比べて著名であったはずである。これらの特権の種類や序列は、まさに当時の社会組織の不変の特性に対応していた。また言ってみればそれらは、社会の構造の中に刻みつけられており、絶えずそこで見出され読み取られることができたのである。そのようなことは、貴族という想念とそれが含む他のすべてのもの、論理的な側面に対しても言えたし、こう言ってよければ、概念的な側面についても言えた。だが別の側面からすれば、貴族階級が出現したのは、長い進化——それは全体として見れば、同時代の社会状況にまさに対応しているのだが、細かい部分は変化に富んでいて予測不可能であった——の結果としてである。貴族の多様な地位は、利口な法学者によって作られた枠組み——それらの地位を占めるようになった人々や、それらの地位の中により人格的なものがあることを捨象したもの——ではなかった。反対に、貴族の称号は、父から子へ、世代から世代へと受け継がれる。遺産もそうであるが、この場合の遺産は精神的で譲渡不可能なものである。称号の価値はすべて、称号を基礎づけ、称号によって保存されているような、栄光や名誉の記憶の数と質の中に存在していた。したがって、称号のことを考えるためには、それらを最初に手に入れた人のことを想起しなければならない。彼らは、称号にいわば自らの刻印を残し、その実際の保持者より前に称号を保有していた。したがって、地位についての論理的な想念の背後には、歴史的事実の総体が見つかるだろう。すなわち、称号はこれら二つの面〔論理的な面と歴史的な面〕を表現しているのだ。称号を保持しておきながら、たとえば革命の翌日にそれらを昔の貴族とは何の血縁もない人々に譲渡するなどというのは、信じられないことだった。そんなことをすれば、称号がかつての伝統的な意味での称号ではなくなってしまうからである。だが逆に、華々しい行為や偉業や武勲を成し遂げた人が何らかの地位を占めるに値するという証拠や、その人が権利上はすでに大昔から何らかの地位を占めていたという証拠のようなものを、これらの行為の中に社会が見て取らなかった場合には、これらの行為は貴族身分を授けるうえでは全く十分ではなかったのである。貴族の組織ペルソナルという枠組みの中で、そして、貴族階級の観念や慣習に従うことによって、貴族候補者は名誉や勇気を持った人間として振舞う。そして、それらに報いるようになる称号は、あらかじめそれらの偉業に付着しているように思われた。それゆえ、貴族の思考においても、事実と観念は互いに区別できない。

われわれの近代社会において、称号は徐々に消えていった。しかし、われわれの集団において最も尊重される資質に恵まれた（あるいはそう見なされている）人々はみな、大衆とは区別され続けているし、上位の階級の成員と見なされている。これらの資質は、非常にうまくフンクシオン職能〔社会や組織の中でその職業が受け持つ一定の役割〕を果たす（純粋な専門ではない活動を行う）ことを可能にする。また、近代社会において認められ定められている人間的な価値の意味や、人々の知識を特に必要としている。したがって人々は、自分が従事している活動類型や従事できる活動類型のことを想像したとたんに、自分が所属している階級を意識するようになる。実際、司法官・医者・公務員などについての社会的想念は存在している。また、営利業にも目を向けるなら、工場経営者、商人、様々な範疇に属する資本家などについての社会的想念も存在する。しかしながら、そうした想念は抽象的なものではない。また、想念が抽象的なものとなるには、社会の

ストルクトゥール・アクチュエル

現在の構造を考えるだけでは十分ではないし、構造の中に様々な職能を認めるだけでは十分ではない。職能を獲得した人々を階級分けする場合、職能がその人々に対して前提とする資質のことを考えるよりも、職能のことを考えることは少ない。ところがこれらの資質は、それ自体では生まれることも発展することもできない。なぜなら、資質は人々の知識や判断を前提としてあるからである。また、何よりもまず人格が配慮されている社会的な場においてしか、資質を正確に評価することは不可能だからである。それゆえ、たとえば裁判官についての想念には、われわれの知っている司法官についての記憶が常に伴う。あるいは少なくとも、われわれの知らない司法官に対して社会が下した判断が伴う。上流階級の商人を商業活動の一般的性質と一緒に考える場合には、私的に関係を持っていて、高額の取引にふさわしい適性を高いレベルで持っているような、特定の人々のことが思い浮かべられている。あるいは、商人だけでなく他の人々の目の前で、商業に属する社会的な地位を長いあいだ正当化している因襲的な理由についての記憶が、少なくとも想起されているのだ。

階級を定義するうえで、何らかの職能についての抽象的な観念で満足するならば、非常に逆説的な結果へと至るだろう。なぜなら、観念は人格を表すことができないだけでなく、階級の意識の中では人格的な資質が前景化するからである。だが逆に、家族との接触や社交界によって育まれた人格的な適性が社会の関心を引くのは、それらの適性が社会にとって有用な場合だけである。すなわち、人格的な適性を持つ人々が彼らの職能の一つに従事することが、人格的な適性によって可能になる場合だけである。それゆえ、階級についての表象は、常に過去と現在に同時に向けられている。なぜなら職能は、現在（社会の不変の条件）の中に存在しているからだ。しかしわれわれの知る限り、職能に従事するのに不可欠な人格的な資質を非常に多く持つ人々は、過去の中でしか資質を発揮できなかったのである。

記憶作用の枠組みは、持続の中と外に同時に存在している。枠組みは持続の外において、枠組みの部分的な安定性や一般性を生み出すイメージや具体的な記憶とつながっている。だが、枠組みの一部は時の流れにつかまっている。枠組みは筏に似ている。筏は水の流れを下っていくが、あまりにもゆっくりと下るので、乗り手は水の上を通して岸から別の岸に行くことができる。また、筏は進んでおり、静止しているわけではない。記憶作用の枠組みについても事情は同じである。すなわち、枠組みに従うことによって、反省や推論を続けながらある想念から別の想念（両方とも一般的で非時間的である）へと移行できるのだ。それは、時間の流れを下ったり上ったりできる（ある記憶から別の記憶へと移行できる）のと同じである。もっと正確に言えば、表象にざっと目を走らせるために選ばれた方向、流れを遡る方向、ある河岸から別の河岸へと移動する方向に応じて、同じ表象がある時は記憶に見え、またある時は想念や一般観念に見えるのである。

(以下、次号)

注

- 1) *Magasin Pittoresque*, 1849, p. 18. 典拠として、作者は次のように述べている。「その主題については、『メルキュール・ド・フランス (*Mercure de France*)』の一七三〇年（最後の数字は空白である）九月号に記事が書かれているし、一七五五年に小論文（題名は示せないが）が書かれており、そこからこの話を借用した」。
- 2) 私の探求の出発点である第一章は、『哲学雑誌 (*Revue philosophique*)』一九二三年一・二月号の論文として出版されている。第一章はほとんどそれを再現したものである。
- 3) お分かりのこととは思いますが、われわれの印象が生み出された後に、それらの印象が一定の時間そしてときには長いあいだ持続するということには、まったく異論はない。しかし、印象の〈反響〉は、記憶の保持として一般に理解されているものとは混同されない。〈反響〉は個々人によって異なるし、おそらく社会的な影響全体を除けば、種によっても異なるであろう。〈反響〉は、心理生理学の領域に属している。社会学的心理学と同じく、心理生理学はひとつの確立した専門領域である。
- 4) これはピエロンの言うこととはほぼ同じである。「象徴作用（言語活動）^{サンボリスム ランガージュ}」のこうした干渉によって、感覚的な支点の役割はさらに目立たなくなる。すなわち、それが想起される感覚的な形式（だがこれは、二次的な重要性しか持たない）よりも、象徴の喚起する力に注意が集まるのである。感覚的な形式がもたら視覚的・聴覚的・運動的であろうと、それらが混ざり合ったものでであろうと、このことに変わりはない」。 *Le cerveau et la pensée*, p. 25.
- 5) Von Wilamowitz Moellendorff, *Platon*, 1^{er} Band, 1920, p. 348 sq. おそらく、『国家』(507b) [『国家(下)』岩波文庫八七-八八頁] においては、イデアはイメージから完全に分離されている（イデアはエイドスと呼ばれているが、形式^{フォルム}と翻訳できる）。したがって、イデアは論理的概念のように見える。プラトンと弟子たちの思想が、弁証法と学派の教えの影響下で発展していくのは、この方向においてである。だが、それはその後の展開である。

[付記]

本訳を作成するにあたって、青木久美子、池田祥英、鶴飼大介、荻野昌弘、木村至聖、田中大介、近森高明、角田隆一、鳥越信吾、松本隆志、横山寿世理の各氏から多大なご助力を賜った（敬称略）。記して感謝する。